

句集

古代筆

淺見明峯

句
集

古代筆

淺
見
明
峯



浅 見 正 雄
明治43年3月31日生

著 書

- | | |
|-----|----------------|
| 随筆集 | 俳風寄せ書帖 (55年刊) |
| 随想集 | 俳風みち草帖 (56年刊) |
| 句 集 | 埴 輪 (58年刊) |
| 随感集 | 俳風徒れづれ帖 (60年刊) |

著 者	浅 見 明 峯	定 価	二〇〇〇円	句 集	古 代 蓮	昭和六十一年五月一日	印 刷
印刷所	大屋印刷株式会社					昭和六十一年五月十日	発 行
発行所	行田市大字下須戸三四						
	浅 見 明 峯 居						
	〒360-04						
	〇四八五―五九―三六四六						

目次

序文

柴田白陽

啓蟄

昭和三十五年 〳 四十二年……………

5

下 萌

雪 解

炎 天

昭和四十三年 〳 四十五年……………

25

行々子

山 梔子

雁來紅

秩父遍路 昭和四十六年 〳 四十八年……………

57

雲雀野

卯の花

春一番

稲妻 昭和四十九年 〽五十一年 ……………

89

春雨

柚子湯

草の戸

野焼 昭和五十二年 〽五十四年 ……………

121

野梅

赤のまゝ

つゞれさせ

走馬灯 昭和五十五年 〽五十七年 ……………

159

潮まねき

落し文

時雨

跋文 石川利根男

あとがき

奥付

序に代えて

柴 田 白 陽

敬愛する浅見明峯さんが、第二句集「古代蓮」を刊行されると言う。小生に序文をと言うことで依頼を受けたが正直のところ筆が重い。と言うのは既に浅見さんの事についてはすでに各巻において詳しく書いているからである。

それは第一句集「埴輪」を一昨年末に出されており、その前、昭和五十五年の古稀記念に随筆集「俳風寄せ書帖」と出しており、昭和五十九年末に「俳風徒れづれ帖」を出している。

全く息つく間もないと言うのはこの事を言うのであろう。やや性急の感なきしもあらずである。

しかしよくも五尺の身体からこれだけの精力が出るものかと思議な感すら持つものである。かなり身体的にも精神的にも負担が過重であったかどうかかわからないが、昨年来入退院を繰り返され、現在幸い健康に戻られたが、これからは年令的に無理はできないと知るべきであろう。

今回の句集は「古代蓮」と命名され、その理由は著者自らが記されているが、誠に当を得て

いる題名と思う。

私も数年前、古代蓮を見たが、その花は清楚で幽玄であり、何とも言えぬ氣品を備えている。且つ又古代からの生命力がたぎっている。

今回の作品は五二三句で前句集に連載しなかったのもあると言うが、総じて近作と見て差支えあるまい

生活記録としてまとめたものであることは共感を覚えるが、最近の作品は人間としての心境を托したもの、濃密な人間の内面を浮き彫りにした様な境涯俳句が多い。

作者は若い頃から職を転々とし、各地に遊んで、人生の裏街道をよく見つめて来た。いわゆる苦勞人である。

最近やや健康を害したとは言え、明治生れの氣骨をもつ、筋金の通ったものがあり、今の世代には誠に貴重な存在である。

その絶えざる情熱が炎となつて、今回の句集を刊行させた。

本来文才ゆたかな浅見明峯さんが、病身に渾身の鞭をあてて、自らをさいなみながらの苦闘の結晶であるとする。

浅見さんはこの生命力あるかぎり、この古代蓮に満足することなく、さらに第三弾を放ってわれわれを瞠目させるものがあるに違いない。

私は浅見さんがこの上共ますます健康に留意され、今までよりも、それから先が正念の場で

あると言う不退転の決意をもって、これからの人生に対決されることを祈念し、更に百寿を完了されることをひたすら懇望し、左に私の推せんする句を揚げて聯さか、祝意を表し、蕪辞を連ねて序文とする次第である。

晩夏光誰があやつる身の哀歎

永遠に去ぬ孫の落書見る春愁

誰も何もいわねば遠し春の雲

海向いて石楠花いつか喘ぎ初む

捨ひいな人の生きざま空しくす

花の命短かし誰に見せばやと

ひまわりの一途が寂し身の空虚

古代蓮さわぐ翡翠の一閃に

背伸びせず日々を涅槃に去年今年

(昭和六十年九月 見晴の茅居にて)

啓

蟄

雪 下

解 萌

昭和二十五年～四十二年

下
萌

戻
ら
ぬ
日
柔
毛
も
深
き
冬
木
の
芽

啓
蟄
の
土
盛
り
あ
げ
て
も
ぐ
ら
も
ち

陽炎や土管くぐりつ子のまろぶ

椿落つ陶の白狐は扉の外に

水温む東塔双輪さかしまに

紫陽花の傾ぎ流れに彩持ちぬ

実梅落つ夕べの雨の大降りに

川床に橋の基礎打つ梅雨夕焼

青葉翳眠る埴輪の愁持ち

蟻地獄脱出しつゝ埋没す

起きて寝てそれだけの過去遠蛙

子等と稲刈り三句
小 さ き 子 等 連 れ て 稲 刈 る 刈 り 競 ひ

末 子 十 ウ 泣 き つ 稲 刈 る 指 傷 め

刈 り 終 へ て 稲 見 る 吾 子 の 物 言 は ず

地蔵盆安寿厨子王語り部に

晩夏光誰が操る身の哀歎

夜も暑し眠れず綴る身辺抄